

現代中国語文法研究の金字塔

木村英樹著

中国語文法の意味とかたち

——「虚」的意味の形態化と
構造化に関する研究

杉村 博文

A5判 358頁
白帝社
[3990円]

本書は「まえがき」「あとがき」「参考文献」「索引」を除くと次のように構成されている。

序

第Ⅰ部 ダイクシスをめぐって

第1章 指示詞の意味機能——指示と代示——

第2章 指示詞の連接機能——指示と定位——

第3章 指示詞のダイクシス——「近」と「遠」——

第4章 三人称代名詞の敬語制約

第5章 疑問詞の意味機能——属性記述と個体指定——

第Ⅱ部 アスペクトをめぐって

第6章 北京官話における「実存相」の意味と形式

——モノ・コトの「時空間的定位」という観点から——

第7章 動詞接辞「了」の意味と機能論的特性

第Ⅲ部 ヴォイスをめぐって

第8章 ヴォイスの意味と構造

第9章 北京官話授与動詞「给」の文法化

第Ⅳ部 構文をめぐって

第10章 的 構文の意味と構造

——事物限定から動作限定へ——

第11章 二重主語文の意味と構造

第12章 有 構文における「時空間存在文」の特性

——所有と存在——

第1章から第12章まで全章いずれもきわめて完成度の高い論文となっており、単独で抜き出しても問題なく読める。序文は、後半は各章の解題であるが、前半は本書の副題における「虚」とは何かが結果構文を例として語られ、「まえがき」

と併せて著者の中国語文法観が示されている。著者の論考は我が国の現代中国語文法研究において圧倒的な影響力を誇る。本書の出版は多くの研究者、特に若い研究者にとって実に待望久しいものであった。

基本的に論文集の体裁を取ってはいるが、本書は著者が自らの中国語文法論と中国語文法研究方法論を個別事象の研究を通して表現したものとして読むべきであろう。各章で取り上げられた言語現象のありさまから、「高度に孤立語的であり、単音節言語であり、早い時期から表意文字をもつに至った」言語である中国語が様々な「虚」的意味を如何にして形態化し、構造化しているか、その実像を著者は広く深く丹念に探り続ける。その作業の遂行において、著者の手に握られた鋭利なメスの一本が著者の母語、日本語である。著者は「あとがき」で次のように述べる。

外国人による中国語研究は、言うまでもなく「外国語研究」としてのそれであり、中国人研究者による「母語研究」としての中国語研究とは、関心の向きも違えば、切り口も異なる。事象を捉える視座も違えば、導かれる結論も自ずと異なる。日本語話者である私にとっての中国語研究は、よくも悪くも、日本語の語感に照らしておもしろいと感じられる、あるいは理解しづらいと感じられる中

国語の文法現象をあれこれ掘り起こし、日本語による思索を通して腑に落ちる解を探し求め、その考察の過程と結論を日本語によつて記述するということである。一言で言えば、日本語話者の視点と思索による中国語文法の把握と記述である。日本語を抜きにしては成り立たない作業である。個別言語を対象とする「外国語」の研究とは畢竟そうしたものである。

この姿勢は全編を通して貫かれ、両言語単独の考察では得ることの難しい洞察が随所に見られる。このことは著者が日本語の文法研究に対しても並々ならぬ造詣の持ち主であることを物語る。対照研究という作業は一見容易に映るが、実際は想像以上に困難であり、対象とする二つの言語について偏ることのない深い理解がない限り、両者の相互照射によるより深化した洞察を得ることは望めない。

しかし、本書を単に中国語と日本語の対照研究と規定するのは本書を過小評価することになる。本書では中国語とそれに対応する日本語の言語現象が、一般言語学の方法論と概念に忠実に則ること、高い可読性をもって分析され、多くの新たな知見が呈示されている。特にダイクシス、アスペクト、ヴォイスという自然言語の文法体系の中核に位置する文法範疇が中国語の文法体系においてどのような特徴をもつて存在

しているかを明らかにした功績は大きい。この意味で、本書は一般言語学、中でも言語類型論、意味論、語用論の進展に大きな貢献をなしている。これは著者の本懐でもあり、「中国語文法の特質を自然言語の普遍性と多様性というパラダイムのなかで捉えたいという」志向が若いときからあったと「あとがき」で述べている。再びこの意味において、本書に対しては評者のような中国語研究者のみならず、一般言語学や他言語の研究者の手になる論評が期待される。

以上、著者の手が操る鋭利なメスとして中日対照的視点を挙げ、また一般言語学の方法論と概念を挙げたが、以下では少し視点を換えて著者の研究者としての真骨頂を挙げ、そこから本書の価値と魅力に接近してみたい。

著者の研究者としての真骨頂の一つは素直にものを見られる目である。著者のものを見る目はきわめて素直である。この資質は何よりも先ず問題の発見の「意外さ」と問題提起の明確さに繋がる。例えば第一部「ダイクシスをめぐって」では指示詞、人称代詞、疑問代詞の最も基本的な意味と用法が組上にあがるのだが、一体そこにどんな問題があると言うのか。第四部第12章はなんと「有」構文における「時空間存在文」の特性——所有と存在——である。ほとんどの読者は一見、何を今さらという意外感に捉われるのではあるまい

か。しかし著者の素直な目は、どの論考においても読む方が恥ずかしくなるくらい、そこに未だ十全な説明の与えられていない現象を一つまた一つと発見してゆくのである。

素直な目はさらにすぐれて明確な問題提起へと繋がる。第3章「指示詞のダイクシス——「近」と「遠」——」から引用してみる。

日本語の「コソア」3系列に対して、中国語の指示詞は、近称の「这(这)」と遠称の「那(那)」の2系列からなる。その〈近〉対〈遠〉の対立の仕組みを十分明確に特徴づけた例をわれわれは知らない。「話し手にとって近いものは「这」で指し、遠いものは「那」で指す」といった説明はどの辞書や文法書にも見られるものであり、事実は確かにそのとおりである。が、それはあくまでも結果を述べているにすぎず、問題は、なにがどうある場合に、中国語の話し手は「近い」と認識し、あるいは「遠い」と認識するのかということである。つまり、〈近〉か〈遠〉かという認識の決定に与る意味論的条件あるいは語用論的条件が具体的に明らかにされることこそが、指示詞の議論にとつては重要なことであり、また実用面でも必要なことなのである。

一読、なすべき作業の内容が素直な筆致で明確に表現され

ていることがわかる。素直で明確な問題提起は後続作業の正しい展開を導き、同時に文章の可読性を高める。このような理詰めで知的な作業の遂行をものを見る目の素直さといったつかみようなない資質に帰せば、論理の飛躍とそしられることは必定である。それは承知している。しかし著者の文章を読むたびに、評者の脳裡には「好人」であれば「好文章」が書けるわけではないが、「好文章」は「好人」にしか書けない」という先人の言葉が自然と浮かんで来るのである。第3章は上の明確な問題提起に導かれ、現場指示用法における「这」と「那」の選択基準が、優先順位を違えず、本質的現象か語用論的現象かを違えず、過不足なく記述されている。

意味と形式の対応そして体系性、この自然言語の文法の基本要件に対する追求を忘れないのも、ものを見る目の素直さの然らしめるところであろう。第10章「的」構文の意味と構造——事物限定から動作限定へ——では次のように問題が追求されている。

今では、この種の構文の意味的特徴および文法的特徴がいかなるものであるかを理解するために必要かつ十分な言語事実がほぼ出そろったと言っても過言ではない。もはや、われわれは記述の段階から説明の段階に移っている。すなわち、この種の構文がいかなる構文の意味とい

かなる文法特徴を具えるものであるかを記述する段階ではなく、なぜこの構造がそのような構文の意味と文法特徴を具えているのかを説明する段階に移行していると言つてよい。目下の課題は、この種の構文が具える意味機能や一連の文法特徴が果たしてなにに由来しているのかを説明する段階に至つていと言える。そこには、当然のことながら、この構文における「的」の働きをどのようなものと解釈するかという問題が決定的に関わっている。本章の課題は、「SYNDE(O)」という構造と、その構造が具える意味の間の関係を、理論上どのように説明づけるかということであり、同時にそれは、この種の構文の構造的な成り立ちを中国語の文法体系のなかでどのように位置づけるかという問題でもある。

このような問題把握から出発し、第10章では「他什么时候买的车?」という構文（における「的」が「这是谁的车?」という構文（における「的」）との関連の中で解釈され、位置づけられ、以下のように結ばれる。

本論は、事物区分機能を担う構造助詞「的」からの拡張の結果として、deが動作区分機能を担っていると考える。事物めあての区分機能から、動作めあての区分機能へと拡張が生じているという解釈である。

他の言語同様、中国語においても、事物指向の表現形式が動作指向の表現形式に拡張するという現象は珍しくない。事物の空間的所在を表す動詞「在」（例えば「他在厨房呢。」「彼は台所にいる。」）が、動作そのものの実在を示す副詞「在」（例えば「他在做饭呢。」「彼は料理を作っているところだ。」）へと拡張すること、事物の授与を表す動詞「給」（例えば「我给她一百块钱。」「私は彼女に「一〇〇元」の金をやった。」）が、動作の受益者を導く前置詞「给」（「我给她当翻译。」「私は彼女に通訳をしてやった。」）へと拡張すること等々が、それに該当する。本論が指摘する、事物指向の構造助詞「的」から動作指向のdeへの拡張という現象も、その一つであると考えられる。

「这是谁的车？」から「他什么时候买的车？」まで、その間には長い道のりが存在するのだが、自然言語の文法の基本要件である意味と形式の対応および体系性を基準として眺めた場合、著者の主張は従来のどの説よりも論の展開が素直である。なお、意味と形式の対応および体系性を取り上げるなら、何を置いても第三部「ヴォイスをめぐる」を紹介すべきであろうが、問題の複雑さから説明により多くの紙幅を必要とするため、割愛せざるを得ない。

著者の研究者としての真骨頂の二つ目は誠実さである。誠

実さは、論証においてはやるべき作業を一つ一つ積み上げ論点を飛躍させないことにつながり、主張の表現においては精錬達意を求めて文章を練り上げることに繋がる。一つの論考を完成するに当たり、往々にしてどこかしら不透明の部分が残ることがある。そしてそれが完全に透明にならずともなんとか先へ進めるような場合、評者などはそのまま先へ行ってしまふことがあるのだが、著者の誠実さはそういう態度を許さない。適格な用例記述を携え、時に強引と思えるほど一つ一つのステップを著者は透明にしてゆく。この点で、本書が何よりもまず扱われた事象の記述文法として一級のものとなっていることを忘れてはならない。

文章表現の精錬達意への腐心はすでに引用したいくつかの断片からだけでも十分に看取してもらえると思うが、学術論文の非常に重要なポイントとして、論証のキーとなる術語や概念の規定が十分に明晰であるということがある。その規定が曖昧だと、厳密な論証は期し難く、文章の可読性も損なわれる。本書の論述はこの点においても新しい術語の提案を含め（例えば動詞接辞「了」、着「および文末助詞「了」、呢」の上位概念としての「実存相」、「処置文」改め「執行使役文」など）、十分に思慮がめぐらされている。

ここまで書いて紙幅はすでに尽きている。許されるものな

ら以上で書評の責を塞ぎたいのだが、著者の主張に具体的に踏み込まないこのような書評は、読者の期待を裏切り、また著者には礼を失するものであろう。以下、再び外国語研究という作業に立ち返り、非母語話者の強みと同居する苦しみを指摘することで、多少とも評者の務めを果たしたいと思う。文末助詞の「了」（以下「了」）の意味記述を例に取ろう。

著者は「了」の意味記述として「新しい状況の出現を表す」を否定し「変化を表す」を選ぶのだが、そうする主たる理由の一つとして「新しい状況の出現」という説明が「多分に曖昧であり、一般性に欠ける」ことを挙げる。確かに「表示新情况的出現」（朱德熙『語法講義』等）という表現は日常言語的であり、概念規定に厳密さが意図されていないように思える。しかしそれでも十分「電車に乗り合わせた向かいの座席

の女性が今、私に一瞥をくれた」のような状況が「了」によって表現されないことの説明になっている。著者は「電車に乗り合わせた向かいの座席の女性が今、私に一瞥をくれた」も「間違はなく私にとって〈新しい状況の出現〉であるはずだ」と考えるのだが、母語話者がそれを「新情況」に含める可能性はありえない。一定の事件性を帯びた出来事であってはじめて、母語話者は「新情況」と見なすはずである。たとえば曖昧さを完全に払拭することは困難だとしても、「新情況」と表現するだけで、それに対応する事態への一定の共通認識が母語話者には得られると考える。

著者はさらに、成立する「小李去厨房包饺子了」と成立しない「??小李在厨房包饺子了」の対立に基づき、空間移動は「変化」として把握し得るがゆえに「了」を用いて表現すること

中国語の文法的意味と表現形式の対応を探る

中国語文法の意味とかたち

木村英樹 著 「虚」の意味の形態化と構造化に関する研究

ことばの散歩道Ⅳ

甚ダシクハ解スルヲ求メズ

上野恵司 著

曹操・陶淵明から兼好法師、
落語の志ん生師匠、野球の
鶴岡監督まで——心に沁みる
名句と抱腹の迷言を愉しむ。

四六判 ■ 1680円

現代中国語の文法的現象を取り上げ、文法の意味と形態、および文法の意味と構造の対応のありようを明らかにする。第Ⅰ部ダイクシスをめぐって 第Ⅱ部アスペクトをめぐって 第Ⅲ部ヴォイスをめぐって 第Ⅳ部 構文をめぐって 付・索引 A5判 ■ 3990円

香港粵語「応用会話」

速読出来

吉川雅之 著

流れのある会話文で話しのつなぎ方
とリスニング力を鍛える。
CD2枚付。 B5判 ■ 360円

白帝社

※価格は税込

〒171-0014 東京都豊島区池袋 2-65-1
TEL 03-3986-3271 FAX 03-3986-3272
http://www.hakuteisha.co.jp

が可能であるが、定位における限界性のない行為は変化性を欠き「了」でそれを表現することはできないと指摘する。しかし「了」が「表示新情況の出現」であれば、即ち一定の事件性を帯びた出来事を報告するものであれば、二例の文法的許容度の相違を事件性の強弱に帰す可能性が生じる。「小李去厨房包饺子了」の方は「小李」が今ここにいないことに對する説明など報告用途が容易に連想されるが、「小李在厨房包饺子了」の方はそれが相対的に困難である。事件性という視点を以て次の二例と比較されたい。

昨天我们在李老师家包饺子了一呢／欸。

胡主任在下半天的会上一打瞌睡了。

この二例はいずれも自然に成立し、括弧内の成分が文の事件化に貢献している。もし「包了饺子」「竟然打起了瞌睡」と表現すれば、文の用途は事件報告から事件叙述に変化する。

北京大学对外汉语教育学院の教材である李曉琪著『現代漢語虚詞講義』（北京大学出版社、二〇〇五年）なども「了」は変化を表すものである。変化の意味を表すのでなければ「了」を用いることはできない」と言い切る。ならば、上の二例そして次の三例における「了」は如何なる意味で「変化」であるのか。

小王把个孩子生在火车上了。

说吧，是不是偷看人家的了？不知道这比考零蛋更可耻吗！
「哪个是你的？」
「奴才的蝻蝻儿叫大将军。」
「谁问你名儿了！哪个是你的蝻蝻儿？」

これらはいずれもありふれた用例である。よって「了」の基本義が「変化」であるなら用例中の「了」に「変化」を読み取るのは容易なはずであるが、評者の理解力ではそこまで及ばない。

たとえ外国語の現象であろうと、非母語話者にも理性的認識に基づきそれはこうだと主張することが可能である。しかし非母語話者にはそれを支える感性的認識能力が与えられていない。非母語話者による外国語研究とはそういう中で行われる、手探りの理詰めには終始する苦しい営みなのである。その意味で言語現象に対する認識に一定の欠落や齟齬が生じる事態は避けられず、ここをどのように克服するかが外国語研究の大きな課題となる。この意味において、本書にも若干議論の余地を残す記述が見られるかも知れない。しかし同時にまたこの意味において、著者のこの本が到達し得た記述の広がりや分析の深みは実に驚嘆に値する。この本は一日も早く英語なり中国語なりに翻訳されて世界中の研究者に読まれるべきだ！ 読めば誰しもこの思いを抱くはずである。

（すぎむら・ひろふみ 大阪大学）